関西学院史に見る新聞教育

—小山東助・河上丈太郎の先駆的役割—

藤　原　　恵

関西学院大学要覧（昭和49年度）によると1912年（明治45年）普通学部を中学部と名称を変更。高等学部（文科．商科）開設。となっており，1921年（大正10年）の項に「高等学部文科及び商科がそれぞれ文学部および高等商業学部に分離独立」と記載している。かくて1929年（昭和4年）3月に西宮市上ヶ原の現在地に移転し，その3年後にすなわち昭和7年に大学令による関西学院大学設立認可となり4月に大学予科を開設し，同時に文学部および高等商業学部は3年制に移行したとなっている。

大学要覧にある「年表」によると1886年（明治19年）以来の経過を順序よく列挙しているが，味もそっけもない無味乾燥な印象を受けるのはやむを得ないことかも知れない。たとえば社会学部成立の過程などは，この年表からは理解できない。年表の後半にただ1行1960年（昭和35年）文学部の社会学科と社会事業学科が分離独立して社会学部開設，とあるだけである。従って各学部それぞれの過去を知るためには，各学部の歴史を探らなければならない。社会学部成立史にしてももちろん総論としての関西学院史を見ておかなければならないことは自明の理である。過去の歩みが現在につながっており，さらに将来への展望につながっているはずだし，反省すべき点は反省し前向きに積極的態度で発展を期すべきこというをまたない。単なる回顧でありノスタルジアであってはならない。そこに視点をおいて関西学院と新聞学（ジャーナリズム）とのかかわりあいというか関連，つながりといったところを，以下年代記風にとりあげて社会学部史への参考資料としていただきたい。

関西で初の社会学部誕生

社会学部では昭和36年度すなわち文学部から独立分離した翌年から数回にわたり，年度末に新年度用のＰＲパンフレット（10ページ内外）を出版している。在学生数とか卒業生就職状況など毎回リライトしているが，内容の本筋はだいたい旧号を踏襲している。このパンフレットのまず第一ページに「社会学部の沿革」をのせている。そこには「関西学院は1889年（明治22年）に創立されたが，1915年（大正4年）高等学部が設置されたときその文科に英文科，哲学科とともに社会学科が誕生した。（中略）1932年（昭和7年）には関西学院専門部文学部社会学科となり，大学が創立されるやこの伝統をうけて関西学院大学文学部社会学科が設置され，また1952年（昭和27年）には社会事業学科が独立し，多数の卒業生を社会に送り出してきた。（中略）これら諸部門の研究を有機的に総合して行うには，文学部社会学科社会事業学科を統一してより広い場を創る必要が生じ，1960年（昭和35年）関西においては始めての社会学部が創立されるにいたった。昭和36年には文学部社会学科，社会事業学科を廃し，その学生を社会学部に編入したのである」となっているが，大学要覧の授業実施要綱・社会学部の項にも「昭和35年4月，学院創立70年の記念として設立されたものであるが，その源は遠く大正4年に設置された」とうたっている。

商科，文科，新聞科設置の計画

ここで気がつくことは大学要覧「年表」では1915年（大正4年）高等学部設置の項目を記載して

いない。1912年（明治45年）の高等学部新設の方を重点的にとりあげるのは当然かも知れないが，大正4年2月の高等学部学科目改正による再出発のことを明記すべきである。いずれにしても要覧年表と社会学部発表との間にくいちがいがあるようにうけとられるおそれがある。その間の事情はどうなっていたのであろうか。

詳しい事情はこれを省略するが，1910年（明治42年）5月18日，関西学院はアメリカ・南メソジスト教会と日本メソジスト教会の共同経営のもとにあったが，この日を期して新たにカナダ・メンジスト教会がその管理者の側に加盟したのである。ここではじめて日英米3国が〝関係〟をもったわけで，爾来学院の式典などにこの3国旗が掲げられるようになった。後年関西学院院長として数々の功績を残した C. J. L, Bates はこのとき，カナダ側の代表として D. R. Mackenzie とともに教職に加わったのである。

ここで学院の石器時代は終り第2期に入ることになる。「開校40年記念関西学院史」によれば「従来の1万5千坪に加うるにさらに1万余坪を購入し，商科，文科，新聞科（文筆を職とするものの養成）及び英語，国語師範科を含む専門学校を新設する計画を立て少くともその1両科のみは，明治45年度よりこれを開始せんと志し，この旨明治44年12月25日をもって一般に発表したりき」と記している。

注意すべきことはジャーナリスト養成のために専門学校としての新聞科を創設しようとしたことである。明治43年下半期から44年の秋ころまでは関係者の間で，この問題が熱心に討議されたものと思われる。「少くとも1科か2科はうんぬん」とあるように協議の結果，私立関西学院神学校を私立関西学院と改称し，学部として神学部および高等学部をおき，後者はさらにこれを文科，商科の2科にわかち，4年をもって修業年限となす，と規則の改正を行い45年1月認可申請を文部大臣に提出している。

校訓 "Mastery for Service"

明治45年4月から高等学部は発足したが新聞科や英語，国語師範科などには手が及ばなかったと見え，文科と商科の2科でスタートしている。文科の学科目や授業時数は当時の国内における専門学校と異り，カナダやアメリカにおけるカレッヂ制度をそのまま踏襲したもののようである。4年制で前期2年は教養科目を並べており，後期2年は専門にあてている。

たとえば文科3，4年は第1類語学及び文学，第2類哲学，第3類歴史及び社会学，第4類理学及び数学，第5類商業にわかれており第1類から第4類までの学科目を選修せしめている。1種の類別コースである。

この高等学部への最初の入学者は僅か39名で，うち文科は3名であった。高等学部長は新任の Bates であるが，教授は嘱託4名を含む計15名である。この時点で初代学部長 Bates がカレッヂのモットーとして "Mastery for Service" をはじめて唱道しはじめたといわれ，Bates が第4代院長となったとき学院全体のモットーとなった。

大正5年（1916年）3月高等学部商科の第1回の卒業生が出た。学生数12名であった。Bates にしてもその協力者 R. C. Armstrong にしても，前者は倫理学，後者は英語，哲学の講義を担当していたし，いわば文科系の教師であるが，肝心の文科はさっぱり振わず，入学者は毎年10名前後あったが途中神学部に転じたり，退学するものが続きほとんど有名無実の状態であった。卒業生名簿に記載されている文科第1回卒業は英文学科8名で1919年（大正8年）であり，翌大正9年に2名，大正10年に4名，いずれも英文学科で大正11年にはじめて社会学科10名が英文学科とともに顔を出している。

はっきりいえば商科はいちおう評判がよいが文科はこのままでは困るということになったらしく，大正4年1月文科の学科目のいれかえや新設など，カリキュラム全般に手を入れ，世人に迎えられるような実際的な改正案をつくり，2月8日文部省から認可がありその後少々の改正はあったが基本路線はここに確立をみた。社会学部のいう高等学部開設大正4年説はここにその原点をおいている。

商科にも新聞学の講義

1915年（大正4年）の改正条項の詳細は省略するが，要するに「高等学部文科を分けて英文学科哲学科，社会学科とす」の条文が新たに挿入されたことで，このことが学院の学科規定の上ではじめて社会学科の字句が現われたことになる。

第1学年は教養コースとし第2学年から第4学年までを専門コースにあてている。第2学年で3学科専攻のそれぞれの授業時数がきめられ，たとえば社会学科では国法学，憲法及行政法，経済学が必修で商業学，簿記学が随意科目となっている。第4学年になると社会学科では新聞学が週2時限で必修となる。高等学部商科は文科の学制改正申請のとき1部手直しをしている。商科第4学年で必修科目のあとに選修科目として新聞学が入っているが，これは文科の講義と合併になっていたのではないかと思う。

今から60年も前に学院商科に新聞学の講義があったことは異とするに足り，当時の全国に散在する各種官公私立の専門学校にいろんな影響を与えこの新学制が注目されたと学院当局が発表していることも妥当である。いずれにしても商科に新聞学開講は新しい試みであったといえよう。高等学部長は Bates であるが学制改正とともに初代文科長に小山東助，商科長に松村吉則が就任し，学部長を中心に完璧の布陣でスタートした。

大正元年は明治45年（1912年）にあたり7月30日大正と改元された。従って大正4年は1915年で改元後3年目である。大正2年3年という時点が学制改正にとってもっとも貴重な時期といえる。すなわち改正草案が関係者間で具体化しつつあったわけで，その中心人物は誰れであったかに興味をそそられる。やはり大正2年に着任した商科の松村吉則（商業学）と文科の小山東助（哲学）ということになるのではなかろうか。

旧制高等学部発足当時からの教授，商科の木村禎橘（商業算術，簿記）や学部長 Bates が松村吉則をバックアップして商科の学制改正に協力したであろうことは容易に想像される。同じように文科長に補せられた小山にしても Bates や木村に相談したであろうし，他の教授ももちろん協力したことであろう。従来の文科は3，4学年で第1類から第5類まで5コースあったものを英，哲，社の3学科に編成し直すことには，教授の中にはかなり抵抗があったかも知れない。

鼎浦・小山東助の登場

文科の学制改正の立案者の中心は小山東助であることは学院史で非常に簡単ではあるが40年史にも50年史でも触れている。大正4年改正はその後1921年（大正10年）3月，学制を改め高等学部を解消して文科，商科はそれぞれ文学部，高等商業学部に改組されるまで継続することになる。しかし大正10年改組ののちもこの大正4年改正の学科課程がずっと引きつがれていく。

社会学部紀要第15号は蔵内数太教授記念号であるが，当時の社会学部長余田博通教授は「記念号によせて」の文中に小山東助の業績を大切にすること，小山こそは50余年前に社会学科を発足させた先駆者でありパイオニアである，ということを蔵内教授から指示された旨記載されている。また小山東助の著作集である「鼎浦全集」についてもそれが稀覯本（きこうぼん）であり，河上丈太郎夫人（末子）を通じて内ヶ崎作三郎方にあった全集を入手し，社会学部へ寄贈してもらったという秘話も紹介している。

実はここまで書いてきて社会学部紀要を創刊号からバックナンバーを調べたところ，第9，10号合併号（関西学院創立75周年・社会学科開設50周年記念論文集）1964年刊の巻頭言に余田博通教授が，W. R. Lumbuth（学院創立者）時代から社会学部として定着するまでの経過を，かなり詳細にたとえば明治45年度と大正4年度の文科の学科課程を表を挿入して説明していることを〝発見〟した。私もこの合併号には「新潟地震の新聞報道」について原稿を載せており，余田教授のこの〝社会部史〟は読ませてもらったはずだし，事実あちこちに赤インクでアンダーラインをしている。だから〝発見〟というのは汗顔のいたりであるが，私の場合テーマのとりあげ方が少し異っているので，特に原田の森時代の社会学科卒業生として体験的にこの小文を続けていきたい。

「鼎浦全集」全3巻の内容

小山東助を知るためには彼の唯一の著作集であ

る「鼎浦全集」によるほかはない。この全集は彼の死後6年を経て1925年（大正14年）6月から8月にかけて，全3巻で東助の弟倉之助の代表する鼎浦会から刊行された。第1巻には大島正徳が序文を書き「小山君はご承知の通り政治家で宗教家で教育者で新聞記者で学者でありました。いわば理論家であり同時に実際家でありました」と述べ理論の中には常に体験の響きがあり，実際に処して立策するときにも，決して理想への方向を指すことを忘れなかった，と東助の功績を讃えている。

第1巻は社会政治篇とでも名づけられるようでまず東助の唯一の社会学に関する著述で博文館から帝国百科全書の1冊として発行された「社会進化論」を全篇収容し，文明評論，政治評論に類する25篇をいちおう年次順に載せている。掲載した新聞紙名や雑誌名がないのは不便である。確認のしようがない。大正4年立候補宣言書のほか彼が大正6年（1917年）7月3日衆議院における演説「言論圧迫に関する質問」の速記が収録されている。

第2巻は宗教篇とでも名づけられるもので単行本として出版した「久遠の基督教」と「光を慕ひて」の2著を採録し，宗教評論という枠のうちに雑誌掲載の文章や教会での講演など，同じく明治40年（1907年）以降を年次順に載せている。彼の盟友内ケ崎作三郎はこの第2巻巻頭に「久遠の基督教」に題す，と序文を寄せている。その中で「わが鼎浦君は歌人としても詩人としても，社会学者としても，新聞記者としても，教育家としても，はたまた政治家としても多大の成功をしたので以て才器の非凡なることを知るべきである。しかし私は彼が鎌倉で聖徒のような死を遂げてから数年を経たる今日において，鼎浦君の最大得意の壇場は宗教であったことを断言する」と断じている。この序文の末尾には大正14年1月20日，第50議会休会明けの日，巣鴨の書屋にて，内ケ崎作三郎，となっている。第3巻は中村吉蔵が序文を書き「文学者としての鼎浦君」の題下に「君が社会学者であり，宗教家であり，また新聞記者たる性能をも備え，さらに政治家，政論家たる材幹をも兼ねているその多方面，多角形の精神組織の中核を一貫していたものは，実は文学者たる君であった，といっても大過はないかと思ううんぬん」のように「研究と思索」「創作，詩歌，感想」の2部に分け，どちらかといえば軟いものを集めている。雑誌などに発表されたものが中心で必ずしも発表の年代順になっていない。この巻には年譜と彼の著作総目録をのせている。また土井晩翠が長篇の「鼎浦君を弔う」の詩を寄せている。

大震災で遺稿大半焼失す

「鼎浦全集」は大正8年10月，彼の死後2ケ月ころから遺稿蒐集をはじめ，途中中絶したが大正12年（1923年）春に全集刊行会をつくり同年8月には1部印刷にかかっていた。予定は全6巻で全著述を集めることになって予約購読者など募集していたが，例の9月1日の関東大震災のため，遺稿は大半烏有に帰し計画は挫折し，大正14年に漸く全3巻で刊行し得た。郷党の後輩相原一郎介，上坂西三や画家有田四郎らが協力して全集の編集に当っている。

第3巻には編集責任者相原一郎介が「内ケ崎作三郎，吉野作造，永井柳太郎，中村吉蔵，土井晩翠，大島正徳諸氏に感謝する」と全集刊行にこれらの友人が協力したことを明らかにしている。全集は現在のB6判に近く各巻550ページから580ページぐらいで，表紙の題字は当時の第1高等学校教授菅虎雄でなかなかの達筆である。発行部数はいくらくらいだったかは分からないが，大した部数ではないことはいまこの全集が古本市場などにもほとんど現われないことからも想像される。

もうひとつ東助について「光炎・鼎浦小山東助伝」が大井胤治著で世界文庫から昭和42年10月に刊行されている。著者は大正5年に東助と同じ気仙沼市に生まれ，拓殖大学在学中から窪田空穂に師事した歌人のようであるが（巻末略歴による）B6判390ページのなかなかしっかりした書物である。全集第3巻所載の東助年譜により，忠実に史実をもとめて微に入り細に入る叙述ぶりである。ノン・フィクションであるがやや事実をフィーチュアライズ（Featurize）している傾向もある。

波瀾に富んだ東助の一生

前記鼎浦全集第3巻所載の年譜を摘記して引用すれば次のようである。

明治12年（1879年）11月（1才）24日，宮城県本吉郡気仙沼町に生る。東助が後年その号を鼎浦といったのは気仙沼湾のことを一名〝鼎ケ浦〟と呼ぶことから引用したもの。

明治26年4月，中学に入学し在学中吉野作造を知る。

明治30年4月，第2高等学校入学，内ケ崎作三郎，島地雷夢らを知る。

明治33年9月，東京帝国大学文科哲学科に入学在学中海老名弾正の本郷教会に関係，島田三郎に私淑す。

明治36年7月（25才）帝国大学卒業，9月島田三郎主宰東京毎日新聞社に入社。

明治40年3月2日，松井菊野と本郷教会で結婚翌41年1月，長女喜美子生る。

明治42年2月，「社会進化論」出版，7月東京毎日新聞社を退社，9月早稲田大学講師となり倫理および新聞研究科の諸講座を担任。

明治43年3月（32才）東京日々新聞社に入る。10月病を獲て早稲田大学，東京日々新聞を退社。11月肺疾のため入院。1年間静養。

明治45年2月，「久遠の基督教」出版，大正元年（改元）9月，再び早稲田大学講師となり同時に千葉県立園芸専門学校講師。

大正2年2月（35才）「光を慕ひて」出版，9月神戸関西学院高等学部文科長に赴任。在任中，加藤直士を助けて「基督教世界」に執筆す。

大正3年5月（36才）以後横浜貿易新報の論説欄を担当す。9月，屢々京都平安教会の教壇に立つ。10月25日，夫人菊野永眠。

大正4年1月（37才）衆議院議員に立候補の決心をなし，関西学院を辞して29日上京。2月初旬横浜貿易新報主筆となる。立候補を宣言，3月25日衆議院議員に当選。

大正5年（1916年）1月，東京毎日新聞主筆となる。翌6年4月，最高点で衆議院議員に当選。7月3日衆議院で言論圧迫に関する質問演説を行う。6年8月から軽井沢，湯ケ原などで静養。7年3月鎌倉に移転。8年6月鎌倉浄妙寺境内に新宅落成，8月25日午前8時自宅で永眠す。41才。

上野公園で Bates と会う

東助がどういう事情で関西学院に赴任することになったのか，また在任中のことや関西学院の教授をやめて上京するにいたった動機などは，当時の彼を知っている人もまだ探せばどこかに残っているかも知れない。しかしここでは彼の書いたものを中心に推測するより他に方法がないと思う。

友人加藤直士が編集責任者で発行していた週刊でキリスト教専門誌「基督教世界」によく原稿を書いている。この雑誌は大阪に本拠をおき創刊も明治20年代と思われるが詳しいことは不明である。明治36年から40年代までのバックナンバーは東大新聞雑誌文庫に保存されている。「基督教世界」の大正2年9月22日号に東助は「六甲山麓より」の一文を載せている。関西学院をとりあげた最初の文章で御影に落ちついて2週間目である。

「摩耶山下の学院生活は予想したよりもむしろ幸福である。高等学部を主宰する Bates さんは日本にくるとすぐ最初の友人を内ケ崎君に見出した。僕は6月の下旬，内ケ崎君に紹介されて始めて Bates さんと上野公園に逢った。3，4時間，10年の知人であるかのように愉快に手を握る幸福を得た」

彼が大阪駅に着いたとき出迎えたのは同郷の後輩木村禎橘で，木村は明治45年4月，高等学部商科開設とともに簿記，計理，商業算術を担当している専任教授である。その日御影の加藤直士の家まで案内している。この木村が東助の生活の安定と病後の健康のことなどを考えて，これから大いに発展する関西学院へやってこぬか，といった手紙を東助に出した。東助はこの手紙をもって内ケ崎に相談に行った。内ケ崎はかねてから教会関係で Bates を知っていたので，たまたま上京した Bates に東助を紹介したということらしい。この会談で東助の西下が大体まとまったとみられる。

妻菊野は病気のため茅ケ崎で療養しており，ひとり娘の喜美子は妻の実家で養われているといった家庭の状況は，東助にとっては経済的にも精神的にも苦しみの連続であったといえないこともな

い。洋行した加藤直士の旧宅に移転しその家を“Exile”（追放者，亡命）と名づけた。いまは亡き友，天才彫刻家荻原守衛（碌山）がかつて角筈にあった彼のアトリエを“Oblivion”（忘却）と名づけていたことを思い出したようである。東助の性格というか当時の心情の一端がうかがわれる。

しかし吉岡美国院長やBates学部長，西川玉之助普通学部長，商科木村禎橘，仙台2高の後輩佐藤清（英文学担当教授，大正2年4月から大正12年3月まで在任）らの友情に包まれて，着任とともに文科の学制改革に乗り出したのである。外部からは海老名弾正や親友早稲田大学の永井柳太郎（関西学院普通部の卒業生で東助を改めて西川玉之助に紹介）らが終始激励の便りをよこした。

政界進出のため教授辞任

東助が関西学院を辞して上京するまでの経緯は「六甲山麓より都大路へ」と題するかなりの長文を「六合雑誌」大正4年5月号に発表しているので大体の事情がわかる。

大正3年10月25日，妻菊野の永眠によるショック，その遺言，自分のライフ・ワーク，洋行か選挙運動か，など右すべきか左すべきかに迷ったことや大正4年1月23日の夜，洋行計画をやめて政界進出を決意するにいたった心境を詳しく述べている。

1月24日は安息日，25日西川中学部長を通じて辞職したい旨学院に通じた。「あまりの唐突にわれながら学院に対してすまないという感じを禁じ得なかった。高等学部のデーンたるBates君は折柄旅行中であったが，吉岡院長は快く僕の決意を聴いてくれられた。さすがに院長は寛大であくまで紳士である。僕に対して一言の不満も疑惑もなく，却って激励と注意を与えられた。僕は意外の喜びを抱いて御影の書斎に帰った」と記している。

1月28日関西学院の学生に対し1時間半におよぶ告別演説を行い，彼は信ずるがまま，思うがままその胸中を批瀝したが，この演説は「僕自身の生涯にとって大いに意義あるものであった」と述懐している。その夜三宮停車場から学生たちに見送られて上京したのである。この稿には選挙運動前記なりの註があり謹んでこの拙き一篇の告白書を友人諸君と亡妻に献ずる，旨末尾に付記している。

「僕は少年時代からひとつの夢を抱いておった。経国の大業即ちそれである。日本国のために一身をささげんとのアンビション即ちそれである」と述べており，少年時代彼の郷里に遊説にきた沼南・島田三郎に魅せられ大学卒業とともに島田の主宰する東京毎日新聞社に入るのである。議院に入る階梯としてこれを選んだ，ともいっている。

「僕は書斎と街頭と2つながらこれを愛するのである。静寂と活動と2つながらこれを慕うのである。僕は一種の二重人格かも知れぬ。動静を体達？し書斎と街頭とを往来せねば衷心の満足を得ないのである」といっており，このあたりに彼の迷いもあったのではなかろうか。

横浜貿易新報の主筆就任

明治42年（1909年）9月彼は早稲田大学の田中穂積に招かれて開設早々の新聞研究科講師となったが，その担当科目は論文，記事，飜訳練習などのほかに西洋新聞雑誌（講読か比較新聞論的なものであったかどうか不明）を受けもっていたようで，島村抱月，頼母木桂吉や杉村楚人冠も講師に顔を出している。官学出身の彼が私学で教えたこと，それも新聞研究科講師だったことは，いろんな意味で彼に示唆するものがあったと思う。千葉園専の講師もしていたがここでは英語担当であった。

病気のため1年1ケ月ほどで早稲田大学を辞し療養につとめ大正元年9月再び早稲田大学につとめることになり，その翌年2年9月に学院に赴任した。学院時代も「基督教世界」のほか「新人」（東京・新人社刊・月刊・基督教専門誌・明治33年7月創刊）や「六合雑誌」（東京・青年会刊・月刊・宗教専門誌・明治13年10月創刊）などに引き続いて執筆しているが，一般新聞に関係していたことは彼の才能が高く評価されていたためである。

大正3年5月以降学院在任中に「横浜貿易新報」の論説欄を担当し，4年2月代議士立候補の

直前同紙の主筆になっている。5年1月「東京毎日新聞」の主筆になったがいつまで主筆だったかわからない。明治43年3月から半歳ほど「東京日々新聞」で評論を執筆していたこともある。

日本ではじめて鉛活字使用の洋紙1枚刷り日刊新聞は明治3年（1870年）12月に発刊された「横浜毎日新聞」である。社長は島田豊寛で島田三郎の養父である。明治12年（1879年）11月18日付から本社を東京に移し「東京横浜毎日新聞」と改題し沼間守一が買収したことになっている。この新聞が「東京毎日新聞」の前身で島田三郎が主宰しているとき東助が入社した。

「横浜貿易新聞」は明治23年（1890年）2月1日創刊された商況紙であるが，のち一般紙に転じ大正のはじめ大阪朝日新聞の経済記者三宅磐を社長に迎え，大正末期までは堂々たる一流地方紙であった。三宅磐を招いたのも島田三郎であり，島田は選挙地盤である横浜では絶大な影響力をもっていた。従って東助が「横貿」の論説担当になり，主筆になったのも島田の推薦によるものであろう。「東京日々新聞」は現在の「毎日新聞」である。

英文学者の佐藤清も同郷

彼の第一回の選挙応援に馳けつけたのは島田三郎をはじめ郷党の盟友内ケ崎作三郎，鈴木文治ら，2回目の選挙には吉野作造，永井柳太郎らも加わり，2回とも連続当選させた。東助の友人知己には学界，思想界，言論界特に新聞人の多いことがめだっている。また彼の亡妻菊野の実姉は新聞記者出身であり，東京助役をしていた田川大吉郎の妻であったことの関係から，田川の衆議院議員選挙には2回長崎へ応援にかけつけている。選挙の実際を知っていたことも政界へ志向せしめた原因のひとつになっていると思う。

東助の関西学院高等学部文科長としての在任は1年6ケ月であるが，文科も3学科に分かれる前であり，文，商，神の3学部（科）で講義をもっており，特に神学部の学生と親しくしていたらしい。田中貞，原野駿雄らの学生（大正8年神学部本科卒）らの名前が登場する。文科英文科卒の実質的第1回卒業は大正8年で9年，10年と続き社会学科第1回卒業生は大正11年3月である。この年10名卒業し以後毎年卒業生が増加していくことになる。

社会学科で新聞学の講義をはじめたのは大正4年（1915年）4月であるが，東助は早稲田大学での経験もあり，おそらく学院に赴任とともに何らかの名目で新聞学にタッチしていたであろうことは確実とみられる。しかし彼の辞任とともに新聞学は休講というか，社会学科に学生が不在ということで，実質的には大正7年4月の入学者が4年生になるまでは開講されなかったと思う。

学院史によれば東助の担当は哲学ということになっているが「文学部回顧」には教え子の談として，心理・論理・思想史・英語・哲学概論などの授業を受けたと語っている。なお商科の木村禎橘は若い時Batesが甲府で宣教師をしていたころからの知己であり，礼拝主事小野善太郎も甲府時代のBatesの友人であったし，木村は郷党の佐藤清を招き，続いて6ケ月後には小山東助をいずれも内ケ崎を仲介というか推薦者にしてBatesに紹介するなど木村の文科に対する熱の入れ方も大したものであった。

河上丈太郎の学院赴任

かくて大正7年4月河上丈太郎が学院高等学部教授として来任し講義をはじめたのである。のち文学部に属して特に社会学科発展のためにいかに尽力したか，その功績の著しいことは学院史の中に特筆されている。河上が学院に赴任するにいたった事情は「私は明治22年（1889年）1月3日，東京芝愛宕山の北側にあたる巴町で生まれた」にはじまる「私の履歴書－日本経済新聞社刊」にやや詳しく書かれている。

第1高等学校から東京帝国大学を卒業したのが大正4年（1915年）高文にも合格していたが官職につくのを断わり，母校立教中学の昇格した立教大学の講師となり，続いて明治学院でも講師として法学通論などを講じたとなっている。在職3年目，大正7年3月に立教大学卒業生の謝恩パーティに出席した。その席上のちにヤマサ醤油の重役になった外岡松五郎から「自分は来月から立教の講師をやめて関西学院へ勤めることになったが一

緒に行かないか」と誘われたのが〝端緒〟となった。東京を離れて暮らしてみるのも経験にもなるし，立教と同じくミッション・スクールだから自分の気持ちにもあうだろう，といった点で神戸行きを決意した。

関西学院高等商業学部20年史によると外岡松五郎は大正6年（1917年）9月商科教授として就任しており商業学を担当し3年後の大正9年3月退任している。だから立教の講師をしているときは既に学院に在籍していたわけで，河上の記憶違いだったかも知れない。退職後外岡は浜口儀兵衛商店（銚子町）につとめていたことになっている。

同じ20年史によると河上は大正7年4月高等学部教授（法律学，財政学担当）10年4月高等学部改組で文学部専任教授となり，高等商業学部では同時に講師となり昭和2年3月まで続いている。河上着任と入れかわりに大正7年3月商科創立の推進者で小山東助と同郷気仙沼出身の木村禎橘が退任している。

恩師野々村戒三と再会

河上の語るところによると「最初は1，2年で東京へ帰る積りであったが，翌大正8年1月（31才）結婚してからはすっかり神戸に落ちついてしまった。立教中学時代1年から5年まで歴史を教えてくれた野々村戒三という先生がいた。京都3中教頭から3高教授となりのち早稲田大学教授になったが，私が神戸へきたときたまたま関西学院中学部長をしていた。私は再会を喜び先生のお宅へ出入りするようになった」と前おきして妻末子と結ばれる経緯を述べている。

野々村は大正5年（1916年）9月第3高等学校教授をやめて中学部長に就任，6年4月文科長を兼任，8年6月高等学部長を兼任，同年12月高等学部長辞任，9年（1920年）2月中学部長兼文科長を辞任。文科長後任に池田多助就任。同年9月Bates，院長に選出される，と年史は語っているが野々村の特に中学部長としての学生，生徒に与えた影響は高く評価されている。

この野々村戒三の妻がメソジスト教会第2代目の監督平岩愃保の娘でその妹4女末子を紹介した。平岩監督の名前は「関西学院教会50年史」にも出てくるが，私は興味をもったのはこの平岩監督が「明治45年1月関西学院の院長に任命された」ということで末子の著書（むら雲のかなたに－昭和37年10月東海大学出版会刊）にノン・フィクション的にとりあげられているということである。

関西学院の院長館が3月末まで使用できないため荷づくりして待機していたところ，メソジスト教会の初代監督本多庸一が旅先の弘前で急に亡くなったため，平岩が第2代ビショップに就任することになった。平岩の関西学院赴任はお流れになったというのである。また同書には「父のはじめのミセスは男爵で英文学者として有名だった神田乃武さんの妹でしたが，そのひとが3人の女の児を残して亡くなられた後に，私の母が歌人三宅花圃女史のお世話で片づいてきたのです」とも書かれており，平岩家の事情もよくわかる。以上は妻が平岩の娘であり，関西学院はメソジスト派のミッション・スクールであり，義父平岩がメソジスト教会の監督という密接な関係ができてしまったため，関西学院に腰を落ちつけるようになった次第である，と明言している。

このことは「その間立教大学から帰ってこいとか，8高からこないかとか，いう話もあったけれども，私には自由なふんいきの関西学院がいちばんぴったり合っているような気がして，とうとう10年もの長い間関西学院から動かなかった」というようにいわゆる〝水があった〟点も見逃してはならない。

河上も学院から政界へ

野々村戒三の夫人は平岩愃保の娘で河上の夫人末子の姉であることは前述したが，もうひとつ私たちに興味がある，といったら語弊があるが，気のつくことは「私の履歴書」で河上は「なお書き忘れたが，妻の長姉は副議長をつとめた民政党の内ケ崎作三郎の夫人である」と書きそえていることである。そうなると内ケ崎・野々村・河上とこの3人は義兄弟になるわけである。同時に平岩愃保が3人の岳父にあたる。世の中は広いようでも狭いものだ，とか，人間関係はどこでどうなっているやら，といったような，いささか因縁ばなし

めいた話を信ずるわけではないが，関西学院を中心として織りなす人間模様のひとこまを見る思いがする。

範囲を煮つめてその一部分をみても，たとえば小山東助・内ケ崎作三郎・吉野作造・永井柳太郎・木村禎橘・佐藤清・Bates・小野善太郎（初代礼拝主事）といった図式も考えられようし，平岩愃保・内ケ崎作三郎・野々村戒三・河上丈太郎・佐藤清（大正2年4月より大正12年3月まで文学部教授として在任）と列記しても地縁的，血縁的なつながりがあることが了解できる。

小山東助は河上丈太郎より10才の年長者であり，たとえば河上が私淑というか心酔していた木下尚江にしても小山東助とは島田三郎を介して知己であり，交渉があったことはあきらかである。島田の率いる「東京毎日新聞」の同僚ででもあった。

東助と河上の2人にとって共通の友人・知己・先輩としておそらく何らかのかたちで交渉があったものと考えられる人々は次の人たちであろう。列記すれば安部磯雄・鈴木文治・内ケ崎作三郎・吉野作造・Bates ほか学院関係者などが指摘される。

特にわが国初の普通選挙法による総選挙は昭和3年（1928年）2月に行われ，この時当選した無産党代議士8名（社会民衆党の安部磯雄・鈴木文治・西尾末広・亀井貫一郎，労農党の山本宣治・水谷長三郎，日本労農党の河上丈太郎，九州民憲党の浅原健三）の同志の1人として安部，鈴木と改めて親交を結んだわけである。

小山東助は大正2年（1913年）9月より大正4年（1915年）1月末まで学院に在職したが，河上は小山の退職後3年を経て大正7年（1918年）4月着任し，昭和2年（1927年）3月教授を退き，あと2年間昭和4年（1929年）3月まで講師として在任し，既に弁護士を開業していた。昭和2年秋日本労農党から阪本勝が兵庫県会議員選挙に最高点で当選するなど，河上の身辺も漸く多忙を極めていたことなどの事情で，昭和2年はじめ政界進出を期して準備を進めていたと思われる。期せずして河上も小山東助の歩んだ道を進むことになったといえる。

小山のプランを河上実現

小山東助が大正4年4月から実現した文科3学科制のプランナーであり中心的存在として推進したことは，衆目の一致するところであり，社会学科専攻学生としてはじめて入学者をみたのは，大正7年4月であることは河上の着任とともに同時にスタートしたわけである。大正10年（1921年）4月高等学部が文学部と高等商業学部に分かれてそれぞれ独立し河上は高等学部教授から文学部教授に転じたのである。ここから河上の八面六臂（ぴ）の活躍がはじまるのである。

小山のもっていたイメージを河上が実現した，中心となって実施に導いたといってもよい。「祖述」ということばがあるが，これは先人の学説を受けつぎ，それにもとづいて学問を進め，述べること，という意味であり河上の場合，小山に対する祖述者であるとみても差し支えない。

また小山がよく口にした〝静より動へ〟とか〝書斎から街頭へ〟といったことばも，小山がそれを実践したように河上も同じように書斎から街頭へとび出している。当時の社会状勢が小山を必要としたように河上を必要としたといえよう。

明治末期からの目ぼしい事件を拾いあげてみても，明治43年日韓併合，44年大逆事件，大正3年（1914年）世界大戦勃発，6年ロシヤ革命とロシヤ帝国の没落，7年（1918年）日本各地で米騒動9年第1回メーデー，12年9月関東大震災，14年東京放送局放送を開始，治安維持法公布，普通選挙法公布，昭和元年日本，円タク時代出現，2年丹後地震，金融恐慌，モラトリアム，3年普選初の総選挙，3.15事件（日共1,600人検挙）4年代議士山本宣治暗殺，日共検挙（4.16事件）5年禁輸出解禁，6年9月満州事変起る。かくて日本はファッショ形成期に入ることになる。

社会の動向というか，流れに対して無関心ではおられなくなったということが，学院文科（文学部）社会学科に対して若いジェネエレーションが関心を持たざるを得なくなったことにも通じており同時に入学志望者が増加してきたことの証左でもある。けだし時勢に適したともみられる。

藤木九三が初代新聞学講師

河上が文学部専任の教授になったとき文学部長にH.F.Woodsworthが就任し，以後Woodsworthをたすけて大正10年4月からその退任まで或（ある）いは文学部学生監として，あるいは社会学科（長）として，足かけ8年間学院のため学生のため献身したが，時代（学生）の要請に応えて教授陣を固めたことは特筆すべきである。

大正7年4月社会学科への新入生のために8年4月から高田保馬を講師として招き社会学を担当せしめた。高田は大正10年3月退職したため東京帝国大学の吉野作造の紹介で新明正道をその後任として，10年4月から教授として招き社会学を担当，続いて12年4月から松沢兼人を新明の紹介で教授（経済学・社会事業担当）に招くなど社会学科の育成とその発展に寄与した河上の功績は大きい。

新明正道は大正15年3月学院を退き東北帝国大学教授に転じたが，松沢兼人は昭和4年神戸市会議員に当選したりしたが，河上，新明，田村市郎（高商部）と政治活動を続け昭和20年度末まで教職にあり，21年代議士（衆議院議員）に当選したもののあと1年間講師として社会政策を講じた。新明が学院を去り河上が中央政界に進出したあと〝孤塁〟を守ったといえよう。

藤本九三が講師として文学部（社会学科）で新聞学を講義したのは，もちろん河上が引っ張ってきたのであるが，学院40年史の年表によると大正14年4月～15年3月となっている。ところが「文学部回顧」に寄せた藤木の随想によるとハミル館で教え，翌年はモダンな文学部新校舎で講義したといっている。

ということになると文科教室としてハミル館を使用しはじめたのは大正9年（1920年）1月からで新校舎が竣工移転したのは大正11年（1922年）4月であるから話の辻褄（つじつま）が合わない。従って藤木が講師になったのは「最初の1年はハミル館」といっているように大正10年4月からである。

藤木九三はわが国著名な登山家であり，詩人であり，朝日新聞記者である。念のため朝日新聞略年譜（50年史記載）をみると大正10年の項に「11月1日神戸通信部長遠藤鱗太郎本社経済部長に転じ，本社より藤木九三その後任として就職」と記載されており，勤務地が神戸であれば学院への交通も便利だし，時間の余裕もあるし，おそらく10年11年の2年間だけでなく12.3年ころまで講師として新聞学を講じたものと思われる。しかし確証はなく当時の社会学科卒業生にあたるよりほかに方法がない。

学院体育会関係年表によると「大正15年4月，直木重一郎・藤木九三両氏によりロッククライミング練習開始（山岳部）」といった項目もあり藤木は時々学院に来ておったようである。また「傾斜地」という学院関係者でつくっていた短歌のグループとも交渉があったらしく，そのリーダー新明正道とも親しかった。

第2代目新聞学は阪本勝

藤木九三のあと1，2年のブランクをおいて阪本勝が新聞学を担当している。河上の「履歴書」によれば「阪本君は大学を出てから大阪毎日の記者をやっていたが，大正の末ごろ私の紹介で関西学院の講師になった。学識も豊かで文学的才能もあり，学生には評判のいい先生としてとおっていた」と述べ昭和2年秋，日本労農党神戸支部は阪本を県会議員の公認候補に推し，最高点で当選した経緯を説明している。

大正15年4月から着任し昭和4年3月に退職したことになっている。私事におよんでいささか恐縮であるが，私が関西学院文学部社会学科第1学年に入学したのは，大正13年（1924年）4月10日で，卒業したのは昭和3年（1928年）3月である。従って昭和2年4月から第4学年に入った時点から，阪本の講義をきいたわけである。

しかしその年の秋に兵庫県会議員に当選したため，授業どころではなかったかとも思うが，莫然とながら覚えていることは「新聞と主権の相剋」といったようなテーマで，先生を囲んでクラス全員（といっても社会学科4年は11名）でディスカッスしたことなどである。テキストはイギリス版の原書である。また私が阪本講師に提出した卒業論文は「新聞の報道価値について」であって，新

聞をよくするものは読者ではなく新聞記者である，新聞は徒らに興味を煽ることをやめ，むしろ告発者として新聞倫理（言論の自由）を確立さすべきである，といった単純な発想で深夜おそくまで西灘村の下宿（農家）の一室でペンを走らせたことを記憶している。

新聞はその国の顔であるということがよくいわれる。とすれば新聞をよくしなければならない。新聞をよくするのはその国の国民（読者）であろうか，新聞をつくる新聞記者であろうか，といった二律背反への惑い，いまだに釈然としないが20才のとき既に割り切っていたのかと思うと，いたずらに馬齢を重ねてきたことへの反省が身を責める。いまはただ阪本先生の健在を祈るのみ。

新明のあとは小松堅太郎

河上，松沢，阪本といった先生が街頭に出て政治活動を始めた当時，やはり学生特に社会学科の学生もこれに呼応し，大正末期から昭和初頭にかけて，かなり大胆に外部に出ていっていわゆる〝無産階級解放〟運動に連帯していた。セツルメントに携わったり労働学校の講師になったり，それなりの活動をしていた。

河上，新明，松沢，田村市郎らは京都の学生事件の余波をうけて家宅捜索をうけたことなど官立だったら，直ちに進退問題が起ったであろうが，学院当局は寛大であったし，教授陣の政治進出についても何ら文句をいわなかったことは，松沢にいわせると「これは政学一体という私学のひとつの特色だったかも知れない」と「学院70年史」で回想しているのが興味深い。

これも同じく河上が招いたと思われる講師に赤松五百磨がある。大正14年4月着任というから新明と1年間ダブるわけであるが，15年3月まで在任している。新明と同じく社会学を担当していたことになっているが，私の記憶では阪本と同じく赤松もドイツ語も講義していたようである。五百磨は克磨の実弟で当時社会運動の闘士であった。

柳宗悦も大正15年4月から昭和4年3月まで英文学担当の講師をしていたが，赤松も柳も私は課目に関係がないのでその講義はきいていない。参考のため大正13年4月入学の社会学科のカリキュラムのうち，その1部の学科目を列記してみると次のようである。1学年は英文学科と共通で教養科目のみで，2学年から社会学科としての専攻に入ることになっている。

社会学の枠の中には社会学・犯罪社会学・統計学・社会政策・社会思想史・社会心理学・社会施設・社会学特殊講義・社会学演習となっており，法律の枠には法学通論・憲法・民法・国際法・法理学（大石兵太郎担当）で政治は国家学・政治思想史，哲学は哲学概論・論理学・心理学（今田恵担当）倫理学など国民道徳や新聞学は独立しており枠で締められていない。新明正道去ったあとは引き続いて小松堅太郎が社会学を担当した。

西灘から上ケ原へ学院移転

当時の文学部について要領よく分かり易く紹介している文章がある。それは「学院70年史」に寄せた古武弥正の回想録の前文であるが次のようにいっている。

「私共は昭和5年旧関西学院文学部4ケ年制に入学した。面白いことにはこの4ケ年制の専門学校は今の新制大学そのままに出来ていた。英文・社会・哲学の3学科があったが，入学第1年度は学科別がなく，今日でいえば一般教育科目である。（中略）だから人文・社会・自然の3系列にわたって科目が並べられ，もちろん語学はうんと沢山あったのだから3，40年も前に関西学院に新制大学ができていたわけになる。専門科目に入り英文・哲学・社会の3学科にわかれるのは第2年度生になってからであった。私は英文科にいたが勉強した原書研究でも今の新制大学の英文科よりはずっとしっかりしたものであった」

同じく「70年史」にのせた今田恵の回想録に次のような1節がある。「私が教師として学院に赴任したのは大正11年である。（中略）文学部には英文科と社会科があり，最上級には英文科に岩橋・寿岳，社会科には大石などの諸君がいた。社会（学）科を開設した時の目標は元来2つあったと聞いている。ひとつは社会事業に従事する人を養成すること，いまひとつはジャーナリズムの教育

をすることであった。しかしそれは時代からずっと進んでいたため実現はしなかった。そして進歩的な社会思想の源泉として一部社会から危険視される傾きさえあった。その後幾星霜，いま社会事業学は大学に開設され，ジャーナリズム教育の必要は新たに研究せられるようになった」と述懐している。

かくて関西学院は兵庫県武庫郡西難村原田の旧校地から，当時の武庫郡甲東村上ケ原（現在西宮市）の新校地に移転，昭和4年（1929年）4月1日から開講した。私たちは西灘村原田での最後の卒業生である。

上ケ原に移るともにかねてから念願の大学昇格への準備は着々と進み，昭和7年4月から法文学部，商経学部及び予科をもつ大学令による関西学院大学が実現した。これは文学部及び高等商業学部を土台にして発展したもので，新たに財団法人関西学院経営のもとに神学部，文学部，高等商業学部を有する専門学校令による関西学院専門部がスタートしたと解すべきである。これに中学部を加えて3学部が大関西学院を構成するというわけである。文，商両学部は従来の学制と異なるカリキュラムを編成し，修業年限3年制で出発した。神学部は予科2年，本科3年の5年制で従来通りの学制である。

尾関岩治が新聞学を担当

ここでは学院85年（昭和49年で創立85年）の歩みを辿っていくことは本旨ではないので省略する。戦時下非常事態のもとで宣教師の帰国，神学部閉鎖，学制の変革など〝疾風怒濤〟の時代を送迎し，昭和23年新制大学が発足しいまや総合大学として堅実な歩みを続けている。

上ケ原に移ってから学院は新聞学をどのように位置づけてきたか，いちおうスケッチしておきたい。学院40年史や「文学部回顧」などを主にしてデータを求め，原田時代の新聞学講義については上述のようになっていることを確認したわけで，私自身の体験でもあり比較的正確であると自負している。

上ケ原に移った当時は阪本勝の講義が1年間続いたが，昭和5年から講義はストップしている。7年大学昇格とともに法文学部で新聞学5単位として学科目に組みこんでいる。また法学科政治学専攻では新聞学を選択科目として1単位となっている。

昭和7年4月発足した3年制の文学部では社会科（社会学科ではない）3年で新聞学を毎周2時間開講している。「50年史」によれば文学部講師として尾関岩治が新聞担当となっている。尾関は同志社大学卒で児童文学の研究家であり作家でもあったが，大阪時事新報の記者をしていたこともある。法文学部の教職員名薄に記載されていないので確認できないが，おそらく法文学部でも講義したのではないかと思う。3年制文学部の第1期生が3年になったのは昭和9年だから，その当時尾関が出講していたと思われる。「70年史」の旧教職員名薄によると尾関は旧高等部文科，文学専門部を引っくるめての略称「文」と法文学部の講師であったとなっている。

商経学部では学院高等商業学校教授鈴木信五郎が広告論を講義しているが，高商でも開講していたと思われる。（昭和15年現在）

新制大学文・法で新聞学

「学院70年史」を見ても昭和23年以降の新制大学移行当時の学則は記載していないので詳細は分からない。「60年史」は昭和24年10月刊だから当然記載されていると思ったがやはり載っていない。「70年史」は昭和34年（1959年）10月刊であるが，34年度実施の学則が載っている。

それによると文学部での専門科目にマス・コミュニケーション（単位4）が入っているが新聞学としては独立していない。ところが巻末付録の現教員名薄（昭和34年10月1日現在）をみると，文学部の兼担講師鈴木信五郎—マス・コミニケーション（広告論）と兼任講師藤原恵—マス・コミュケーション（新聞学）と記されている。マス・コミュニケーション論といったものは開講されていなかったのではないか。法学部では専門科目として新聞学（単位4）を開講しており私が担当している。

また私事でいささか忸怩（じくじ）たるものがあるが，勤務先である朝日新聞社の承認のもとに

昭和24年4月から同志社大学文学部で非常勤として新聞学を講じ28年3月辞任し4月から帝塚山学院短期大学へ，それとダブって関西学院大学へは30年4月から文，法2学部へ出講，37年1月朝日新聞社を定年退社し，4月1日関西学院大学社会学部勤務（教授）を命ぜられ現在にいたった。なお朝日新聞社に在社中32年4月から4年間京都大学教育学部で新聞学を担当した。

昭和25年4月から1時的措置ともみられる短期大学が生まれた。修業年限2年で商科，英文科，応用化学科の3科である。英文科に新聞学が専門科目として単位4でマークされている。短大は昭和31年（1956年）度は学生を募集していない。以後閉鎖である。短大における新聞学担当者は分からない。

新聞学担当講師としてはたとえば大正末期から昭和初期にかけては，河上個人の知已である新聞記者を招いているが，日本が戦時体制に入るとともに新聞社自身も何かと慌しい空気に包まれてくるし新聞記者も特派員などで戦地に出向するようになり，人手不足におちいったため現場からの出講は期待できなくなった。またその時点では一般大学にとっても〝新聞学どころじゃない〟といった対応をしていたと思われる。

関西学院の場合，70年史付録の人名簿の中に，たとえば藤田進一郎（文）講師，とあるが何年から何年までどの学部（科）で講師だったか分からない。藤木九三と並んで名前が載っているので，私も偶然に発見したのであるが，藤田は朝日新聞社で大阪在勤の論説委員をしていた古い記者である。おそらく専門部文学部か文学専門部で新聞学を講じたと思われる。昭和20年代の末期には関西大学文学部で新聞学関係の教授になっている。

各大学における新聞教育

「関西学院と新聞学」といったような茫漠（ぼうばく）としたテーマを選んだ場合，頼るべきデータは学院内のどこかで保存されていることと思うが，いまは学院の外部にある，よしそれが学院史や年表，パンフレット類であっても，外部に向かって〝放出〟されたもののうちからデータを選ばざるを得ない。たとえば藤田進一郎を「名簿」の中から発掘するといったように。

だから完璧（かんぺき）なテーマに即した内容の構成はむつかしい。腰を据えてじっくり取りくむことが必要であり他日に期待したい。アウトラインだけはどうにか捕えることができたのではないかと思う。新聞学といったような学問領域は決して華やかなものではなく，渺（びょう）たる存在かも知れない。といって無関心であってはいけない。電波ジャーナリズムが活字ジャーナリズムに対抗して，互いに競合しているというひとつの現象をとってみても，新聞学の領域が拡大してきたことの証左でもある。

東京帝国大学の文学部に新聞研究室をつくったのは昭和4年（1929年）11月1日で小野秀雄がプランナーでありプロモーターであるが，上智大学ではやはり小野が中心となり昭和7年4月に専門部新聞科を発足させておりこの2大学が新聞教育に先鞭（べん）をつけたパイオニアーである。

戦後は上智のほか早稲田大学，関西大学，日本大学に新聞学科を，東京大学，慶応義塾大学には新聞研究所，東海大学に広報学科が設けられた。立教大学，同志社大学，成城大学，関西学院大学，東洋大学などには新聞学のコースが設けられたと川中康弘は上智大学新聞学科40年の歩みという報告の中で，各大学の名を列挙している。

こういった各大学における新聞学へのとりくみなどの比較研究はここではとりあげないことにする。他大学に比して関西学院は新聞学，ジャーナリズム論などのカリキュラムへの導入が決しておそくなかったことを強調しておきたい。小山東助が明治42年（1909年）9月新設された早稲田大学の新聞研究科の講師であったという経験を，関西学院で高等学部の学制に生かした，というような事情もあり新聞教育プロパーについては，関西においてはもちろんトップに実施したことになる。

早稲田大学の新聞研究科にしても新聞記者養成に主眼をおいたもので，一時的施設に終っており，記者養成のための専門学校は明治32年（1899年）に東京で開校されているなどこのジャンルはまた別個のものである。

関西学院のもつふん囲気

原田時代から上ケ原を通じて関西学院の卒業生にジャーナリストが，特に卒業生の少なかった戦前の卒業生に多数出ているという事実は何が原因か，といった問題も一考に値することではあるがここでは触れない。新聞学うんぬんは関係のないことで，関西学院のもつ雰（ふん）囲気が一般学生をして，ジャーナリズムへの関心を醸成せしめたのではなかろうか，とだけいっておきたい。

この場合雰囲気を文章で表現するのは少々むつかしい。ただひとついえることは，大正時代から学生会活動がさかんであったこと，それに対して学院当局が常に暖く見守り，むしろバックアップしたこと，など体験的に説明し証明することができる。特に社会学科学生が主唱したジャーナリズム講演会，新聞連続講座，新聞学会，社会学会，新聞部を含む出版活動などの計画に対し，物心両面からの援助があったことを想起する。

〔注〕文中の人名は原則としてすべて敬称を略した。自分の恩師に対して呼びつけにすることにはかなり抵抗感があったが「資料」としてまとめるために敢えて敬称を使わなかった。参考にしたり引用した文献の書目などはその都度，文中に明記しておいたがここで一括して列記しておきたい。ただし順序不同である。

開校40年記念「関西学院史」昭和4年9月刊
「関西学院50年史」昭和15年6月刊
「関西学院60年史」昭和24年10月刊
「関西学院70年史」昭和34年10月刊
「関西学院写真帳」同窓会刊昭和14年
「関西学院目で見る70年史」昭和34年
「関西学院高等商業部20年史」昭和6年11月刊
「関西学院創立75周年」パンフレット
「関西学院教会50年史」昭和41年6月刊
「関西学院創立者ランバス伝」昭和34年10月刊
「In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D.D. 1953年（昭和28年）刊
「ウェンライト博士伝」昭和15年刊
「関西学院学生会抄史」昭和12年刊
「関西学院グリークラブ史」昭和15年刊
「関西学院新聞部40年」昭和38年8月刊
「文学部回顧」昭和6年1月刊
「文学部創立回顧」昭和9年12月刊
「鼎浦全集」第1巻，第2巻，第3巻　大正14年6月7月，8月刊
大井胤治「光炎・鼎浦小山東助伝」昭和42年10月刊
河上丈太郎「私の履歴書」昭和36年8月刊
河上民雄「河上丈太郎演説集」昭和41年4月刊
日本社会党「河上丈太郎・十字架委員長の人と生涯」昭和41年12月刊
河上末子「むら雲のかなたに」昭和37年10月刊
関西学院新聞部「現代ジャーナリズム論—その分析と批判—」昭和23年8月刊
小野秀雄「新聞研究50年」昭和46年刊
上智大学「コミュニケーション研究」第6号，昭和48年12月刊
関西学院大学社会学部紀要第9，10合併号，その他